



元気っ子

No.285 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

5月に入りました。相変わらずコロナウイルスは猛威をふるい続けています。しかし、先月の「元気っ子」でも書きましたが、コロナウイルス感染症時代においても、またその収束後においても乳幼児期の教育への権利の保障、またいかなるときでも子どもの最善の利益を最優先にした保育は実践されていかななくてはならないことは常に我々大人の心に留めておかななくてはならないことだと思います。

このことを踏まえて、先月号の最後に、「いかに子どもたちが自ら育とうとする力を存分に発揮できる環境を整えられるかにかかってくると言えます。保育園において、大人は子どもたちに何かを教えたりする指導者としての立場ではなく、あくまでも「支援者」でなくてはなりません。」と書きました。このことをもう少し深くお話していきます。

まず、分かりやすい例として学校教育は「知識や技術を身につけさせること」を目的としています。なので、そこに関わる大人は「指導者」として知識や技術を伝達し、子どもはその指導に従って、何かが「できるように」なります。それに対して、保育所保育指針には「保育における教育とは、子どもの発達を保障すること」とあります。子どもの発達は大人がアレコレ指導をして遂げさせるものではなく、自らが環境を通して育っていくことが発達なので、そこに関わる大人は「支援者」という立ち位置になります。ここで大切になるのが、子どもは「環境を通して」育っていくということです。「環境」とは子どもを取り巻くあらゆる事象ですが、大きく「空間」「物」「人」とカテゴリー分けされます。つまり、「支援者」としての我々保育者がまず大切にしなければいけないことは子どもたちにしっかりと「必要な環境を用意する」ということになります。

そして、その豊かな環境の中で、子どもたちの探索意欲や好奇心、また、心情→意欲→態度と心が動くことを大切にしながら、その環境を自ら選択できることが可視化されていることを保障していくことが支援者としての役割になります。そういった環境の中での遊びや生活の中で、子どもたちが活動に没頭し、それができるだけ子ども同士だけの関係の中で行われるように、大人はあまり介入せずに、しっかりと子どもたちを見守ること、そして、困ったらいつでも助ける用意があるということを子どもたちにきちんと伝え、大人はどっしりと構えて「安心基地」になってあげることこそが、我々、保育者の「支援者」としての大切な役目になります。

現在、ながさわ保育園のコーナー保育を見直しています。夏までには各コーナーをしっかりと整備できるかと思います。子どもたちが遊びに没頭できる、豊かなコーナーを目指しています。どうぞ楽しみにお待ちください。

